

ひかりのこ

11月園便り

聖ミカエル幼稚園
2014年10月23日

おゆうぎ会も間近。園児数増加により、今年から大きく形を変えることとなり、保護者の皆様にもご理解とご協力をお願いすることとなりました。しかし昨年と同じ形ではないけれど、違う形だからこそ新たな良さも生まれるものです。

今回のおゆうぎ会は縦のクラスと、年長さんのクラスの4つの演目に分かれます。各演目では一人ひとりのお子さんの成長がよく見られるように各クラス工夫しています。

ばんださんの体を使った遊び、結構難しいバランス取る動きに、子ども達は懸命にチャレンジしています。きりんさんの昔の遊びは、けん玉のいろいろな技にチャレンジします。けん玉名人の教会のおじいさんたちや、暁子先生の小学生のお子さんにも見本を見せてもらいながら練習を重ねてきました。らいおんさんの歌と楽器は、ピアノに合わせて素敵な合奏と歌を聞かせてくれます。息がぴったり合ってとっても素敵です。

年長さんのおゆうぎは圧巻です。おゆうぎの合間に、跳び箱のかなり高い段にもみんな挑戦します。ほんの少し前にはほとんど誰も飛べなかったのに…。

先生たちは一人ひとりの子ども達に向き合いながら、昨日より少しでもできることが増えるように懸命に声かけをし、できた時には一緒に大喜びします。できないからと言ってあきらめないで、子どもを励まし、どうしたらできるかを日々工夫しています。

私は16日の衣装替え練習で、初めて通して発表を見ましたが、懸命に頑張ろうとする子ども達の姿に感動しました。また、年長さんの立派な姿に年長さんが入園したころを思い出して、「あんなに小さかった子ども達が・・・。」と目頭が熱くなりました。

子ども達の持っている力は計り知れません。どんなに小さくたって、子ども達は体の中に成長の芽をしっかりと育てています。私たち教員は、子ども達の持っている力を信じ、その力をどう引き出していくか考え、話し合い、工夫を重ねるのです。今この原稿を書いている私の後ろでも担任の先生と補助の先生の綿密な打ち合わせが行われています。

2日後の本番では、当日の出来だけではなく、その裏にあるお子さん方の今までの努力と先生方の願い、そしてそれらがあってのお子さん方の成長をご家族でぜひご覧ください。

園長 渡部良子

月主題：みのりがいっぱい

- ・自分の気持ちや考えを出し合いながら友だちと過ごす
- ・いろいろな人の働きを心にとめる
- ・秋のみのりやたくさんのお恵みを喜び感謝する

キリスト教保育

世間では忘れた頃に通り魔事件が発生して、理不尽な現実引き戻される思いがします。犯人は「誰でも良かった」といい、社会に対する恨みをほのめかすことも多いようです。ただしこれは警察発表ですので、犯人がそう言ったというよりは、供述を総合すると、どうもそのようだという事だと思えます。私が今まで刑務所の教誨師として受刑者から話しを聞いた時にも、混乱してなぜ罪を犯したのか、自分でもよく分からないケースがあります。そういう話しを聴くにつけ、もしその人が健全な人間同士の交わりの中に生きていれば、犯罪を未然に防ぐことができたのではないかなと思わされます。聖書的に言えば、「隣人」を喪失した状態だったのです。

柳澤桂子さんという、長年深刻な病いに直面した科学者が、『癒されて生きる～女性生命科学者の心の旅路』（岩波現代文庫）という本を書いています。その中で、「私の苦しみをいっしょにわけもとうと手を差し伸べてくれるひとがいるということは、人間のもつもっとも大きな喜びの一つではなかろうか」と語っています。このことは、病いの中にある方に限らず、社会的な孤立によって「生きる意味」を失いかけた時に、それを回復してくれるのは周囲の人々の存在だということを示しています。生きる意味とは、自分で探し求めるといよりは、隣人から与えられるものだという事でしょうか。

聖ミカエル幼稚園が宗教色を前面に出すことに抵抗を感じられる方もたまにおられるかも知れません。でも、こどもたちが、手を合わせてお父さんお母さん、お友だちのために祈るといふ経験を重ねていくことは、やがて自分も人から祈られ、支えられていることを知ることに繋がります。人の交わりの中に生きることの喜びと感謝こそが人間の成長に不可欠なのです。自分は決して独りではない、そういう安心感の中で育てて欲しいと願っています。

チャプレン 司祭 下澤 昌